

日本作業科学研究会 第 **24** 回 学術大会

The 24<sup>th</sup> Japanese Conference of Occupational Science

# 日々の暮らしを彩る作業

*Occupation that enriches our everyday life*

日時

ライブ配信日：2021年**10月23日**（土）**24日**（日）  
（オンデマンド配信期間：2021年10月9日（土）～11月6日（土））

大会長


山根 伸吾（藍野大学）

Dates

Live streaming : Oct. 23<sup>rd</sup>(Sat.) 24<sup>th</sup>(Sun.), 2021  
On Demand : Oct. 9<sup>th</sup>(Sat.) – Nov. 6<sup>th</sup>(Sat.), 2021

Conference  
Chair

Shingo Yamane (Aino University)



主催：日本作業科学研究会  
Japanese Society to the Study of Occupation

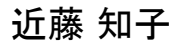
## 目 次

会長挨拶	1
大会長挨拶	3
参加者へのご案内	5
プログラム	6
抄録	
佐藤剛記念講演	8
基調講演	10
特別講演	12
ワークショップ 1	14
ワークショップ 2	16
自主企画ワークショップ	18
一般演題	21
第24回学術大会 実行委員名簿	39

## Contents

JJOS Chairperson Greeting	2
Executive Committee Chairperson Greeting	4
Information for Participants	6
Programs	7
Abstracts	
Tsuyoshi Sato Memorial Lecture	9
Keynote Lecture	11
Special Lecture	13
Workshop 1	15
Workshop 2	17
Workshops (Independent Planning)	18
General Sessions	21
Executive Committee Members	39

## 會長挨撈



日本作業科学研究会会長

新型コロナウイルス感染症による影響が続く中、日本作業科学研究会第24回学術大会にご参加いただきますこと、心よりお礼申し上げます。また、様々な現場で奮闘されている皆様に心より敬意を表します。

昨年広島で開催を予定されていた本学会は、コロナ禍により中止となりましたが、今年は、山根大会長、そして広島を中心とする実行委員の方々のご尽力により、ようやく皆様とお会いすることができる運びになりました。オンラインで開催に際し、様々な新しさへの挑戦があったことと思います。山根大会長、そして実行委員の皆様のご努力に感謝いたします。禍から始まった挑戦ではありますが、これが作業科学研究会のさらなる発展に活かされてくことと信じております。

さて、第 24 回学術大会では、初めてのオンライン開催に加え、もう一点新しい点がございます。それは、この集まりの名称が「作業科学セミナー」から「日本作業科学研究会学術大会」になったということです。20 数年前に始まったこの会は、当初は、有志十数人が作業についての講義を聞いたり、意見を交換したりする場所でした。

これに対し、現在は会員 200 名あまりとなった本研究会で、この集まりは、新しい参加者も含め「作業科学」への関心を持つ様々な方々が、より広く多様な意見に触れ、発言し、交換する場へと変容して参りました。この変化に相応しいものとして、「学術大会」という名称使うことにいたしました。名称の変化に伴い、この会でさらなる学術的交流が促進されることを期待しております。

第 24 回学術集会のテーマは、「日々の暮らしを彩る作業」です。そして、山根大会長率いる実行委員の皆様が、工夫を凝らし、様々な企画を立ててくださっています。参加者の皆様には、2 年ぶりに「作業」について話し、聞き、刺激を受けるこの機会を、是非とも楽しんでいただきたいと心より願っております。

## JJOS Chairperson Greeting



Tomoko Kondo

Chair of the Japanese Society for the Study of Occupation

We are pleased that you are attending the 24th Academic Conference of the Japanese Society for the Study of Occupation (JSSO), despite the ongoing COVID-19 pandemic. I would also like to say that I have the utmost respect for everyone putting in efforts in various fields under difficult circumstances.

This conference was scheduled to be held in Hiroshima last year but had to be cancelled due to the COVID-19 situation. This year, however, thanks to Senior Chair Yamane and the executive committee members, mostly based in Hiroshima, we are finally able to see you all. My sincere gratitude, therefore, to Senior Chair Yamane and the committee members for their efforts to move this conference online as it must have involved various new challenges. Although the COVID-19 crisis necessitated this move, I believe that we can turn it to our advantage for the society's further development.

Besides being held online for the first time, the conference has one additional change—that in name, from the Occupational Science Seminar to the Academic Conference of JSSO. This conference, which began more than 20 years ago, initially had just a dozen or so volunteers listening to occupational science lectures and exchanging opinions.

Today, our society has grown to more than 200 members, and the conference has transformed into a platform where diverse individuals, including new participants interested in occupational science, can listen to, voice, and exchange a much wider variety of opinions—the decision to name it “academic conference” was to reflect this change; we hope that this promotes further, and rich, academic exchange.

The theme of the 24th Academic Conference is “Occupation that enriches our everyday life.” The executive committee members, led by Senior Chair Yamane, have been devising and developing various projects in accordance with this theme. I sincerely hope that all of you will enjoy this opportunity to talk about, listen to, and be inspired by “work” for the first time in two years.

## 大会長挨拶



山根 伸吾

日本作業科学研究会第24回学術大会大会長

日本作業科学研究会 第24回学術大会にご参加頂き、ありがとうございます。

昨年度、広島での開催を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により中止となり、2年ぶりの開催となります。

本学術大会のテーマは「日々の暮らしを彩る作業」です。このテーマを決めた際には、現在のようなコロナの状況は想定しておりませんでした。

2020年3月13日の当会のHPを見ると、私はこのようにご案内しておりました。

「作業は日常に埋め込まれているため捉え難く、見過ごされてしまうとも言われます。しかし、当たり前の日常にこそ、かけがえのない彩りをもつ作業が、そして暮らしを多様に彩る作業があるのではないのでしょうか。また、これらの作業は、持続可能(サステナブル)な作業なのではないでしょうか。」

くしくも、現在、このテーマを再認識するような状況にあります。当たり前のように見えていた日常が大きく変わり、個人の作業も社会の作業もあり方が変わっていききました。

マスク、手洗い、ホームステイ、働き方や仕事内容の変化、余暇の過ごし方、移動手段の選択、社会やコミュニティへの繋がりが、手探りをしながら、作業そのものの実施を控えたり、実施の形態を選択してきたように思います。そして、自身の時間や資源をどのような作業に使うかということが、自身の健康に直結することを、再認識する機会となりました。

また、人が作業的存在であることの逞しさを感じることもありました。デリバリーサービスの急速な充実、WEB会議システムの普及と人びとの適応、メディアを見るとおうち時間をより良く過ごすための商品、情報、サービスが溢れています。どのような状況にあっても、私たちは創意工夫を凝らして、作業と結びつこうとしているように見えます。作業の視点から社会を見ることで気づくことが多いと、改めて感じる日々です。皆様はこの状況における作業をどのように見ておられるのか、ぜひ共有して頂けたらと思います。

今回から、これまでの「作業科学セミナー」から「学術大会」へと名称も変わり、そして初めてのWEBでの開催でもあります。年に一度のこの集まりは学術活動であるとともに、作業に関心を持つ人たちのコミュニケーションや交流の場でもあったと思います。本学術大会への皆様のニーズを、実行委員のメンバー全員で考えながら、準備を進めてまいりました。参加される皆様に、思い思いの方法で、楽しんで頂けたらと存じます。

実行委員を代表して



## Executive Committee Chairperson Greeting



Shingo Yamane

Chair of 24th congress of the Japanese Society  
for the Study of Occupation

Thank you for attending the 24th Japanese Conference of Occupational Science.

This conference will be held for the first time in two years, as it was postponed due to the effects of the COVID-19. The theme of this conference is "Occupation that enriches our everyday life". When we decided on this theme, we did not anticipate the current situation caused by COVID-19.

We are now in a situation where we are reaffirming this theme. The daily life that we had taken for granted has changed drastically and occupation has changed. Wearing masks, hand washing, homestays, changes in work styles and jobs, how we spend our leisure time, how we choose our means of transportation, how we connect to society and the community. It was also an opportunity for us to reaffirm that what kind of occupation we use our time and resources for is directly related to our own health.

I also felt that "Humans are occupational beings". The rapid expansion of delivery services, the spread of web conferencing systems and people's adaptation to them, and the media are full of products, information, and services to help people spend their time at home better. No matter what the situation is, we seem to be trying to connect with occupation in an ingenious way.

From this year, the name of the conference has changed, and for the first time, it will be held on the web. We believe that this annual gathering was not only an academic activity but also a place for communication and exchange among people who are interested in occupational science. All members of the executive committee have been preparing for this conference by considering the needs of everyone. We hope that you will share with us how you see occupation in this situation. We hope that everyone who participates in the conference will enjoy it in their own way.

## 参加者へのご案内

本学術大会は、リアルタイム配信とオンデマンド配信で行います。リアルタイム配信は10月23～24日、オンデマンド配信は10月9日～11月6日までです。オンデマンド配信では、すべての講演と一般演題の動画を視聴できます。リアルタイム配信では、すべての講演と一般演題の質疑応答およびワークショップを行います。学術大会特設ホームページから講演や一般演題、ワークショップに関連する動画、抄録、事前資料、リアルタイム配信用のZOOMミーティング情報をご覧ください。学術大会特設ホームページを閲覧するためには、IDとパスワードが必要です。IDとパスワードは10月5日頃、参加費の振込みが確認できた方にメールで送信します。

### 【リアルタイム配信について】

- ・事前にZOOMミーティング情報をメールで送信します。自主企画ワークショップ以外は、共通のZOOMミーティングになります。自主企画ワークショップのZOOMミーティング情報は、学術大会特設ホームページでご確認ください。
- ・名簿で参加費振り込みの確認を行ってから、入室を許可しますので、待機室でお待ちください。
- ・ZOOMの名前を「受付番号－氏名(フルネーム)@所属」に変更してください。
- ・マイクは、発言時以外はミュートにしてご参加ください。
- ・お昼休み(12時～13時半)には、ブレイクルームを設けます。興味のあるルームに自由に入って、ご歓談ください。

### 【オンデマンド配信におけるコメントについて】

- ・講演と一般演題に関するコメント(質問や感想など)を学術大会特設ホームページで受け付けます。リアルタイム配信前に寄せられたコメントに関しては、リアルタイム配信時の質疑応答で取り上げさせていただく場合があります。一般演題に関するコメントに関しては、可能な範囲で演者からの返信をお願いします。講演に関するコメントに対しての返信はありません。

### 【その他の注意事項】

- ・リアルタイム配信ならびにオンデマンド配信時にビデオ撮影・録音・写真撮影(スクリーンショットを含む)を行うこと、ウェブ上(SNSを含む)に公開することは固く禁じます。

## プログラム 10月23日(土) 1日目

9:00～	開場		
9:15～9:30	開会式		
9:30～11:00	<b>【ワークショップ1】</b> <b>作業ポートフォリオチャートを使っの自己理解</b> 講師 吉川ひろみ(県立広島大学)		
11:30～12:00	<b>【特別講演】</b> (講演は事前にオンデマンド配信します。ここでは質疑応答を行います) <b>精神科における認知機能リハビリテーションの必要性和その効果</b> <b>～医師の視点から精神科病院の作業療法を考える～</b> 講師 藤巻康一郎(県立広島大学) 司会 古山千佳子(県立広島大学)		
13:30～14:30	<b>【一般演題】第1部</b> (発表は事前にオンデマンド配信します。ここでは質疑応答を行います)		
14:45～15:45	<b>【一般演題】第2部</b> (発表は事前にオンデマンド配信します。ここでは質疑応答を行います)		
16:00～17:30	<b>【自主企画ワークショップ】</b> <b>WFOT:作業的ナラティブデータベースプロジェクトと作業理解</b> 企画者 近藤知子 (杏林大学)	<b>作業的写真プロジェクトの改善</b> 企画者 小田原悦子・他 (ウチソト勉強会)	<b>作業レコードを使ってみよう</b> 企画者 高木雅之 (県立広島大学)

## プログラム 10月24日(日) 2日目

9:00～	開場		
9:30～10:00	<b>【基調講演】</b> (講演は事前にオンデマンド配信します。ここでは質疑応答を行います) <b>作業経験を知る:Well-beingへの入口</b> 講師 Karen Adler (コロラド州立大学) 司会 近藤知子(杏林大学)・齋藤さわ子(茨城県立医療大学)		
11:30～12:00	<b>【佐藤剛記念講演】</b> (講演は事前にオンデマンド配信します。ここでは質疑応答を行います) <b>脊髄損傷青年のオートエスノグラフィ</b> 講師 西方浩一(文京学院大学) 司会 山根伸吾(藍野大学)		
13:30～15:00	<b>【ワークショップ2】</b> <b>世界の食卓を語り、未来のあなたと私の持続可能な日常の作業を想像する</b> 講師 吉田美穂(国際環境協力ネットワーク)		
15:15～15:30	閉会式		



## Program Oct. 23th (Sat) Day 1

9:00～	Opening
9:15～9:30	Opening Ceremony
9:30～11:00	<b>【Workshop 1】</b> <b>Understanding myself using the Occupational Portfolio Chart</b> Lecturer: Hiromi Yoshikawa (Prefectural University of Hiroshima)
11:30～12:00	<b>【Special Lecture】</b> <b>The effect of cognitive rehabilitation therapy required in psychiatric treatment</b> <b>- A psychiatrist attempted to consider the significance of occupational therapy in psychiatric hospital -</b> Lecturer: Koichiro Fujimaki (Prefectural University of Hiroshima) Chairperson: Chikako Koyama (Prefectural University of Hiroshima)
13:30～14:30	<b>【General Session】 Part 1</b>
14:45～15:45	<b>【General Session】 Part 2</b>
16:00～17:30	<b>【Workshops (Independent Planning)】</b>

## Program Oct. 24th (Sun) Day 2

9:00～	Opening
9:30～10:00	<b>【Keynote Lecture】</b> <b>Knowing Occupational Experiences: A Gateway to Well-being</b> Lecturer: Karen Atler (Colorado State University) Chairperson: Tomoko Kondo (Kyorin University) Sawako Saito (Ibaraki Prefectural University of Health Sciences)
11:30～12:00	<b>【Tsuyoshi Sato Memorial Lecture】</b> <b>Autoethnography of an adolescent with spinal cord injury</b> Lecturer: Hirokazu Nishikata (Bunkyo Gakuin University) Chairperson: Shingo Yamane (Aino University)
13:30～15:00	<b>【Workshop 2】</b> <b>Tales of dinner tables around the world, imagining your and my future sustainable daily occupation</b> Lecturer: Miho W. Yoshida (International Network for Environmental & Humanitarian Cooperation Non-profit Inc.)
15:15～15:30	Closing Ceremony



## 脊髄損傷青年のオートエスノグラフィー

講師: 西方 浩一 (文京学院大学)

司会: 山根 伸吾 (藍野大学)

病気や障害を経験した人々にとって作業に参加すること、適応とはどのようなことなのでしょう？

参加は、2001年に世界保健機構(WHO)が国際生活機能分類を発表して以来、作業療法を含む保健医療福祉分野において健康や幸福の概念と結びつけ広く用いられるようになりました。参加は、作業することと同義語として用いられ、主に作業の個人的・主観的な遂行の概念として議論されています(Aldrich&Heatwole, 2018)。

適応は、作業療法、作業科学の黎明期から重要な概念として取りあげられてきました。作業療法の創設に関わったMeyer(1922)は、多くの病気は適応の問題であると指摘し、作業が生活の問題への適応に多大に貢献することを提示しました。作業科学においても、適応は作業参加を通して健康や幸福に影響を与える基盤となる概念と示されています(Frank, 1996)。

私は、佐藤剛記念講演のお話をいただき、どのようなテーマでお話しようか悩みました。私がお話できることは何だろうと考えた末、私自身の経験をお話しようと思いました。私は16歳、高校1年生の時に体操の事故により頸髄損傷を受傷し障害をもちました。受傷後、私は、首から下の身体を自由を失い、数ヶ月間にわたりベッドで寝たきりの生活をしました。約半年間の入院中、2度の手術を受け、理学療法や作業療法を行いました。私は杖を使いながら歩くことができるようになり退院しました。その後、私は高校への復学も果たしましたが、受傷前とは大きくかけ離れた経験をしました。本講演では、この私自身の経験をオートエスノグラフィーの手法を用いて振り返り、聴衆の皆さんと共有したいと考えます。そしてこの私自身の経験から作業と参加、適応について考えてみたいと思います。

## 略歴

1992年に専門学校社会医学技術学院作業療法学科を卒業し、緑成会病院、緑成会整育園にて作業療法士として成人、小児を対象とした作業療法に従事した。1999年、城西医療技術専門学校講師、2006年に筑波大学大学院教育研究科で修士号、2014年に聖隷クリストファー大学大学院リハビリテーション科学研究科で博士号を取得。現在は文京学院大学保健医療技術学部作業療法学科准教授として勤務している。

**Autoethnography of an adolescent with spinal cord injury**

Lecturer: Hirokazu Nishikata (Bunkyo Gakuin University)

Chairperson: Shingo Yamane (Aino University)

What does occupational participation and adaptation mean for people experiencing illness or disability?

The term *participation* has become widely used in the field of health and welfare, including occupational therapy, in connection with the concepts of health and well-being, since the International Classification of Functioning, Disability and Health (ICF) was published by the World Health Organization (WHO) in 2001. *Participation* is used as a synonym for occupation and is mainly discussed as a concept of an individualized and subjective performance of an occupation (Aldrich & Heatwole, 2018).

The term *adaptation* has been a critical concept since the early days of occupational therapy and occupational science. Meyer (1922), one of the founders of occupational therapy, pointed out that many diseases are problems of adaptation, and occupations can contribute greatly to adaptation to the problems of living. In occupational science, *adaptation* is the foundational concept that impact health and well-being through occupational participation (Frank, 1996).

When I was invited to give the Tsuyoshi Sato Memorial Lecture, I had a hard time deciding what topic to talk about. After giving some thoughts on what I could talk about, I decided to talk about my own experience. When I was 16 years old, a freshman in high school, I suffered a cervical spinal cord injury in a gymnastics accident and became disabled. After the injury, I lost the freedom of my body from the neck down and was bedridden for several months. During the six months of hospitalization, I underwent two surgeries and physical and occupational therapy. I gained ability to walk with the help of a cane and was released from the hospital. After that, I was able to return to high school, but it was a very different experience from before the injury. In this lecture, I would like to reflect on my own experience using autoethnography and share it with the audience to discuss about occupation, participation, and adaptation.

**Short bio:**

Hirokazu Nishikata graduated from The Japanese School of Technology for Social Medicine, March 1992. He worked at Ryokuseikai Hospital and Ryokuseikai Seikuen as an occupational therapist. In 1999, he worked at The Josai College of Medical Arts and Science as lecturer. He earned the Master of Science degree in Education from Tsukuba University in 2006. He earned the Doctor of Philosophy degree in Rehabilitation Science from the Seirei Christopher University in 2014. Currently he is an associate professor at Department of Occupational Therapy of Bunkyo Gakuin University.



## 作業経験を知る: Well-being への入口

講師: Karen Adler (コロラド州立大学 作業療法学科)

司会: 近藤 知子 (杏林大学)・齋藤 さわ子 (茨城県立医療大学)

作業科学は、健康と well-being における作業の基本的な性質を探求し、知識を深めることを目的とした学問です。本講演では well-being への入口として、作業経験と呼ばれる主観的あるいは内在者的な作業の視点に、特に焦点を当てます。Hasselkus 博士が述べているように「作業を経験することによって私たち自身の well-being も育まれます」(2012 年, p.187)。作業の主観的な視点が well-being と相関するというエビデンスが増え続けている一方で、その研究は依然としてわずかしきありません。これは個人的な作業経験を明らかにするアセスメントが少ないことが一因となっています。さらにこれらのアセスメントのほとんどは、最近の作業遂行に関する個別の経験ではなく、過去の作業遂行に関する包括的な評価をするものです。

本講演では、自分や他者の作業を吟味することを通じて作業経験に関連する重要な概念を探求し、作業経験プロフィール(Occupational Experience Profile: OEP)を紹介します。OEP は成人や高齢者が、最近の作業遂行における喜び(楽しみ)、生産性(達成感)、回復(エネルギーの回復あるいは消耗)、社会とのつながり(つながりの感覚)という 4 つのニーズに基づいた作業経験のレベルを記録できるように設計された初めての評価法です。OEP の特徴は、ダイナミックな作業経験の相互作用的な視点と、作業のトランザクショナルな視点を評価できることです。最新の研究では、well-being を促進するために、作業経験の認識や well-being との関連性の探求、そして作業を変化させることを支援する重要な情報を提供するという点において、OEP の有用性が実証されています。また、OEP から算出した作業経験の直線的な測定値が、より強固な成果指標として使用できるかどうかを検討した最近の研究も紹介し、個人や集団レベルにおける作業と well-being との関連性を探るための OEP を使用することへの影響についても議論していきます。

### 略歴:

Karen Adler は米国コロラド州フォートコリンズにある、コロラド州立大学作業療法(OT)学科の准教授です。作業療法士として 35 年のキャリアを持ち、2012 年に博士号を取得しました。彼女は人々が自分自身の作業、すなわち自分が必要としている、望んでいる、あるいはしなければならない活動を意識して選択することで、自分の人生を演出する能動的な主体となるよう、支援することに情熱を注いでいます。Adler 博士は、人々が自分の行っていることと自身の well-being の関係性に気づくためのツールとして、作業経験プロフィール(OEP)を開発しました。OEP は内在者の視点を大切に時間軸の日記帳であり、人々の日常生活活動に伴う喜び(楽しみ)、生産性(達成感)、回復(再生感)、社会とのつながりという経験を記録に残していくことができます。

**Knowing Occupational Experiences: A Gateway to Well-being**

Lecturer: Karen Adler (Colorado State University)

Chairperson: Tomoko Kondo (Kyorin University)

Sawako Saito (Ibaraki Prefectural University of Health Sciences)

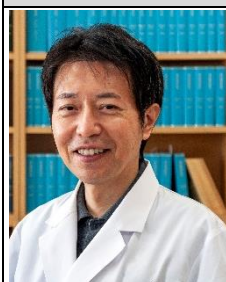
As a discipline, Occupational Science aims to explore and build knowledge of the basic nature of occupation in health and well-being. In this presentation we will specifically focus on the subjective or insiders' perspective of occupation, referred to as occupational experience, as a gateway to well-being. As Dr. Hasselkus stated, "It is in the experiencing of occupation that our own well-being... is nurtured" (2012, p.187). While evidence that the subjective perspective of occupation correlates to well-being continues to grow, research remains limited. This is due in part to the small number of assessments that reveal individuals' occupational experiences. In addition, most of these assessments evaluate global experiences of past occupational performance, rather than discrete experiences of recent occupational performance.

Following exploration of key concepts related to occupational experience through examination of their own and other's occupations, participants will be introduced to the Occupational Experience Profile (OEP). The OEP represents the first assessment tool designed to enable adults and older adults to record their levels of four need-based occupational experiences: pleasure (enjoyment), productivity (sense of accomplishment), restoration (energy renewal or drain) and social connection (sense of connectedness) during recent occupational performances. Uniquely the OEP allows for examination of the dynamic interrelated view of occupational experience, and a transactional perspective of occupation. Current research demonstrates the utility of the OEP to support awareness of occupational experiences, exploration of the link to well-being, and valuable information to support change in occupation to promote well-being. Recent work examining whether linear measures of occupational experience can be generated from the OEP to strengthen its use as an outcome measure will also be shared. Implications for the use of the OEP to explore connections between occupation and well-being at the individual and population level will be discussed.

**Short bio:**

Karen Adler is an Associate Professor in the Department of Occupational Therapy (OT) at Colorado State University, Fort Collins, Colorado USA. She has been an occupational therapist for 35 years and obtained her doctorate in 2012. Karen is passionate about empowering people to become active agents in directing their own lives, through making conscientious choices about their occupations, or the activities they need, want, and have to do. Dr. Adler developed the Occupational Experience Profile (OEP) as one tool to help people become aware of the relationship between what they do and their well-being. The OEP is a time-use diary that honors the insider perspective, capturing people's experiences of pleasure (enjoyment), productivity (sense of accomplishment), restoration (sense of renewal), and social connectedness that are associated with their everyday activities.





## 精神科における認知機能リハビリテーションの必要性和その効果 ～医師の視点から精神科病院の作業療法を考える～

講師: 藤巻 康一郎 (県立広島大学)

司会: 古山 千佳子 (県立広島大学)

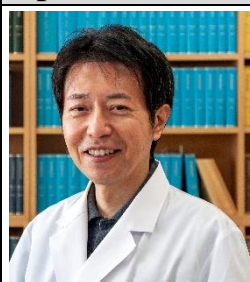
重度の精神疾患は認知機能障害を伴う可能性が高く、特に統合失調症においては全般的な認知機能の低下が多く認められる。認知機能の低下は就労場面や日常生活での困難に繋がり、ストレスの原因となることから、間接的に病状の悪化を招くとされている。また、認知機能の障害は機能的な転帰とも関連している。そのため、統合失調症に対する認知機能のリハビリは有用なものであるとされるが、症状の改善に留まらず、自己価値の再獲得にも一定の効果をもたらす可能性がある。近年は、NEAR (Neuropsychological Educational Approach to Cognitive Remediation) や Vocational Cognitive Ability Training by Jcores (VCAT-J) などの認知機能リハビリテーションが施行されているが、我々グループはそれらを参考にした「まなびば」というプログラムを作成した。プログラムは、週2回のパソコンセッション(60分)と週1回の言語セッション(60分)から成っており、計12週(24回)を1クールとしている。パソコンセッションでは、認知機能の改善を目的としたゲーム(J-cores)が行われ、注意機能・作業記憶・処理速度・言語記憶・流暢性・遂行機能の6領域に関連する課題が参加者には提示される。また、言語セッションでは、日常への般化を目的としてメタ認知に働きかけながら、主に注意・集中・記憶についてのディスカッションが行われる。なお、参加者にはプログラムの開始前と終了後に、BACS-Jを始めとした認知機能評価に加え、AMPSなど作業遂行の質・作業遂行能力評価が実施され、加えて自己効力感評価も行われた。

この度の発表では、数値的な変化だけでなく、参加者の質的な変化にも注目し、プログラムの有用性について多面的に考察した内容を報告する。加えて、この認知機能リハビリテーションが現在なぜ必要とされるかについて実践例の視点から報告することとする。

### 略歴:

平成4年: 山形大学医学部医学科卒業, 平成4年: 医療法人慈心会村上病院 医師, 平成7年: 山形大学医学部分子病態学講座 ティーチング・アシスタント, 平成8年: 山形大学大学院医学研究科博士課程修了(博士(医学)), 平成8年: 若宮病院 医師, 平成10年: 医療法人清明会新庄明和病院 医師, 平成11年: 医療法人明和会琵琶湖病院 医師, 平成11年: 滋賀医科大学分子神経科学研究センター 助手, 平成13-15年: アメリカ国立衛生研究所, 国立精神衛生研究所分子神経生物部門留学, 平成15年: 山梨大学大学院医学工学総合研究部精神神経医学 助手, 平成16年: 東京大学医学部附属病院精神神経科 助手, 平成17年: 県立広島大学保健福祉学部作業療法学科 助教授, 平成19年: 県立広島大学保健福祉学部作業療法学科 准教授, 平成21年: 県立広島大学保健福祉学部助産学専攻科 准教授(兼職), 平成22年: 県立広島大学保健福祉学部作業療法学科 教授(現在に至る), 県立広島大学保健福祉学部助産学専攻科 教授(兼職), 県立広島大学総合学術研究科保健福祉学専攻 教授(現在に至る)





## **The effect of cognitive rehabilitation therapy required in psychiatric treatment**

**~ A psychiatrist attempted to consider the significance of occupational therapy in psychiatric hospital~**

Lecturer: Koichiro Fujimaki (Prefectural University of Hiroshima)

Chairperson: Chikako Koyama (Prefectural University of Hiroshima)

Severe mental disorder is more likely to be accompanied by cognitive impairment, especially in schizophrenia, where general cognitive decline is often observed. Decline in cognitive functioning leads to difficulties in employment situations and daily life, and causes stress, which is indirectly related to the deterioration of the medical condition. In short, cognitive impairment has also been associated with clinical outcomes. Recently, cognitive rehabilitation programs such as NEAR (Neuropsychological Educational Approach to Cognitive Remediation) and VCAT-J (Vocational Cognitive Ability Training by Jcores) have been implemented. Our group created a program called "Manabiba" based on them. Manabiba has been run by a multidisciplinary team (doctor, occupational therapist, clinical psychologist). In this program, patients completed VCAT-J training procedures using the software of the Japanese Cognitive Rehabilitation Program for Schizophrenia (Jcores). VCAT-J training consists of twice weekly, hour-long computerized training sessions using Jcores and weekly, hour-long group sessions over 12 weeks. In computerized training sessions, participants were presented with tasks related to the six domains of attention, working memory, motor speed, verbal memory, verbal fluency, and executive function. In group sessions, attention, concentration, and memory were mainly discussed, with reference to metacognition for generalization to daily life. At the beginning and end of the program, participants were assessed for cognitive functioning using the brief assessment of cognition in schizophrenia Japanese version (BACS-J) and other cognitive assessments, as well as the Assessment of motor and process skills (AMPS), and self-efficacy assessments.

In this presentation, we will be discussing the usefulness of the program from multiple perspectives, focusing not only on the numerical changes in assessments but also on the qualitative changes in the participants. We will also report on why cognitive rehabilitation is currently in demand, based on practical examples.

### Short bio:

**【EDUCATION】** Bachelor of Medicine, Yamagata University School of Medicine (1992), Doctor of Medicine, Graduate School of Medical Science, Yamagata University (1996)

**【PROFESSIONAL EXPERIENCE】** Psychiatrist, Murakami Hospital (1992-1996), Teaching Assistant, Yamagata University School of Medicine (1995-1996), Psychiatrist, Wakamiya Hospital (1996-1998), Psychiatrist, Shinjo-Meiwa Hospital (1998-1999), Psychiatrist, Biwako Hospital (1999), Assistant Professor, Shiga University of Medical Science (1999-2003), Investigator funded by a grant from the National Alliance for Research on Schizophrenia and Depression, Molecular Neurobiology Section, Mood and Anxiety Disorders Program, National Institute of Mental Health, National Institutes of Health (2001-2003), Assistant Professor, Yamanashi University (2003-2004), Assistant Professor, University of Tokyo Hospital (2004-2005), Associate Professor, Prefectural University of Hiroshima (2005-2010), Professor, Prefectural University of Hiroshima (2010-2021)



## 作業ポートフォリオチャートを使つての自己理解

講師: 吉川 ひろみ (県立広島大学)

作業科学(以下 OS)は、人間を作業的存在として理解するところから始まる。作業の理解を深めるためには、作業の当事者の視点が不可欠である。そこで自分自身を作業的存在として理解するための方法として、作業ポートフォリオチャート(以下 OP チャート)を開発した。OP チャートは、栗田らが教員の教育改善を目的に活用を推進しているティーチング・ポートフォリオ (TP) チャートを参考に考案した。OP チャートの項目は、being, becoming, belonging につながる doing が作業であるとする Wilcock と Townsend の考えに基づいている。2018 年から、作業科学の授業やセミナーで OP チャートを使用している。

OP チャート作成手順は、1) いつ、どこで、何をしたか・しているか(doing), 2) どのように、なぜ行ったか(doing), 3) 自分の役割や特徴(being), 4) 所属集団(belonging), 5) 将来になりたい自分像(becoming), 6) 全体の関係性, 7) になりたい自分になるためのプランの順に、1 枚のシートに記入していく。作成の途中にペアワークの時間があり、相手に説明する。作成後に、自身の OP チャートの内容を文章化することで、作業レンズを通して自分自身を理解することができると考えている。

### 文献:

栗田佳代子, 吉田壘, 大野智久(2018). 教師のための「なりたい教師」になれる本. 学陽書房.

Wilcock, W. A., Townsend, E. A. (2014). Occupational justice. In Schell, B. A. B., Gilen, G., Scaffa, M. E.(Ed). *Willard & Spackman's Occupational Therapy 12<sup>th</sup> ed.* Lippincott Williams & Wilkins, Philadelphia, pp.541-552.

吉川ひろみ(2018). 作業ポートフォリオチャートの開発と使用経験. 第 22 回作業科学セミナー抄録.

### 略歴:

1982 年, 国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院卒業. 奥鹿教湯温泉病院(現・鹿教湯三才山病院)などで作業療法士として勤務. 1995 年より県立広島大学(当時・広島県立保健福祉短大), 2004 年より教授. 1992 年頃から 1 年半, 米国ウェスタンミシガン大学に留学し修士号取得, 2010 年に吉備国際大学にて博士号取得. 担当科目は作業科学, 生命倫理学など.

翻訳『COPM カナダ作業遂行測定』(大学教育出版). 著書『倫理でスッカリ医療従事者のモヤモヤ解消法』(シービーアール), 『作業療法の話をしよう: 作業の力に気づくための歴史・理論・実践』(医学書院), 『「作業」って何だろう 作業科学入門第 2 版』(医歯薬出版)など.

日本作業科学研究会オンライン研修特設委員会委員, 日本作業療法教育学会理事, 作業遂行研究会会長, プレイバックシアター劇団しましま代表.

**Understanding myself using the Occupational Portfolio Chart**

Lecturer: Hiromi Yoshikawa (Prefectural University of Hiroshima)

A person is understood as an occupational being in occupational science. The Occupational Portfolio Chart (OP chart) was developed as a tool to understand a person as an occupational being. The OP chart was developed based on the Teaching Portfolio (TP) chart. The TP chart is used for improvement of education for teachers (Kurita et al, 2018). The OP chart includes the idea that is “doing” become occupation if “doing” guides “being”, “becoming”, and “belonging” (Wilcock & Townsend, 2014).

The OP chart is a sheet consisting of 7 parts: 1) when/where/what do/did you do? 2) how/why do/did you do? 3) what were your character or roles? 4) to what kind of groups do/did you belong? 5) What will you become? 6) how are those connected? 7) what is your plan to become what you want? There is a sharing time with a partner as a pair-work. Participants explain their chart to their partners during pair-work time. Participants will understand themselves through occupational lens when they make a statement of their OP chart after complete the OP chart.

**References:**

- Kurita, K., Yoshida, R., Ohno, T. (2018). *Kyoshi notameno Naritai kyoshi ni nareru hon.* Gakuyosyobo.
- Wilcock, W. A., Townsend, E. A. (2014). Occupational justice. In Schell, B. A. B., Gilen, G., Scaffa, M. E. (Ed). *Willard & Spackman's Occupational Therapy 12<sup>th</sup> ed.* Lippincott Williams & Wilkins, Philadelphia, pp.541-552.
- Yoshikawa, H. (2018). Development and use of the Occupational Portfolio Chart. The 22<sup>nd</sup> Occupational Science Seminar Abstract

**Short bio:**

Hiromi Yoshikawa graduated from the National Hospital Organization Tokyo National Hospital Rehabilitation School. She worked Oku-Kakeyu Onsen Hospital as an occupational therapist. She has taught at Prefectural University of Hiroshima since 1995. She earned her master degree from Western Michigan University in 1993 and Doctoral degree from Kibi International University in 2010. She translated the *Canadian Occupational Performance Measure*. She published the books such as *Rinri de Sukkiri, Sagyoryohou no Hanashi wo Shiyo, Sagyotte Nandarou*. She is a member of the committee of online workshops in the Japanese Society for the Study of Occupation, a board member of the Japanese Occupational Therapy Education, the president of the Society for Occupational Performance, and the director of Playback theatre company C-ma C-ma.



## 世界の食卓を語り、 未来のあなたと私の持続可能な日常の作業を想像する

講師: 吉田美穂

(国際環境協力ネットワーク 理事 主任研究員, JICA 独立行政法人  
国際協力機構 青年海外協力隊事務局 技術顧問(障害者支援分野))

2021 年夏, COVID-19 蔓延悪化が懸念される東京で「より速く, より高く, より強く」を目指すオリンピックが開催され, COVID-19 蔓延は制御不能の状態になった。日本国内の一日の感染者は2万5千人を超え, 感染収束の兆しが全く見えない状態でパラリンピックが開催された。地球環境の悪化進行によって人類の生活状況も悪化し, 「より速く, より高く, より強く」経済発展を目指す世界は 21 世紀の後半にはたちいなくなる。21 世紀の豊かな社会を作るわたしたちの作業は「より愉(たの)しく, よりしなやかに, より末永く」という価値を探究していくべきである。「愉しく」は QOL(生活の質), 「しなやか」はレジリエンス(回復力), 「末永く」はサステナビリティ(持続可能性)を意味する。

「だれ一人取り残さない」開発目標 SDGs は 17 の目標と 169 のターゲットとして 2015 年から 2030 年までの期間, 世界中で実施される。わたしたちが「より愉(たの)しく, よりしなやかに, より末永く」日々の作業を積み重ねていくことに密接に関係する SDGs 目標 1(貧困をなくそう), 目標 3(すべての人に健康と福祉を), 目標 4(質の高い教育をみんなに), 目標 10(人や国の不平等をなくそう), 目標 13(気候変動に具体的な対策を), 目標 17(パートナーシップで目標を達成しよう)の 6 つを未来の作業と共に考えていきたい。

後半に実施するフォトランゲージ, 「世界の食卓」ワークショップでは世界の様々な国の家族の一週間分の食料をみて, 世界中の色々な地域の人々の生活と作業を想像する。多様性と包摂が尊重され個々の彩りある作業が実現できる社会を創るために, 一見遠く感じられる世界の人々の暮らしについて, 想像力を働かせ, 偏見や無関心を超えて共感的に理解する。世界の様々な地域に住む様々な人たちとわたしたちが地球の資源を分かち合い, 「より愉(たの)しく, よりしなやかに, より末永く」彩りある作業を続けて行くことができる未来像を描く。

### 略歴:

仕事: 国際協力開発コンサルタント 作業療法士でもある

国際開発コンサルタントとは? ⇒国際協力のための調査や計画作り, 計画の運営, 評価を行う仕事  
北海道札幌出身 2001 年札幌医科大学 作業科学の修士課程を終了

成人身体障害一般, 脳卒中の回復期, 急性期, 小児(脳性まひ), 高齢者, 在宅の OT

フィリピン, キルギスタン, パキスタン, エジプト, ミャンマー, イランに保健・障害者支援分野の JICA 専門家, 企画調査員として支援の調査・計画作成・実施をおこなった。

現在はパキスタンでの水資源の確保と住民啓発プロジェクト, イランでのアフガニスタン難民支援を行っている。

## Workshop 2

Oct. 24<sup>th</sup> (Sun) 13:30~15:00



### **Tales of dinner tables around the world, imagining your and my future sustainable daily occupation**

Lecturer: Miho W. YOSHIDA (International Network for Environmental & Humanitarian Cooperation Non-profit Inc., Technical Adviser, Secretariat of Japan Overseas Cooperation Volunteers JICA)

In the summer of 2021, the Olympic Games were held in Tokyo, where the COVID-19 epidemic was feared to be worsening. The Olympic athletes competed with their physical abilities to show "faster, higher, and stronger". Even during the Olympics, the COVID-19 epidemic spread and became uncontrollable. The Paralympics were held under such circumstances. Our task in creating a prosperous society in the 21st century should be to explore the value of "QOL, Resilience, and Sustainability".

The SDGs are a set of 17 goals and 169 targets that will be implemented worldwide from 2015 to 2030. The SDGs, which are closely related to our daily occupation to be "QOL, Resilience, and Sustainability" are Goal 1 (No Poverty), Goal 3 (Good Health and Well-Being), Goal 4 (Quality Education), Goal 10 (Reduce Inequality), and Goal 13 (Climate Action). Goal 17 (Partnerships for The Goals) are the six goals we would like to consider with the future life and occupation.

A photolanguage workshop hold in the second half of the meeting. The theme will be "Tales of dinner tables around the world, imagining your and my future sustainable daily occupation". By looking at a week's worth of food for families in various countries around the world, we will imagine the lives of people in various parts of the world. The goal is to create a society where diversity and inclusion are respected and where people can realize their own colorful occupation. Use their imagination to empathically understand the lives of people in seemingly distant parts of the world without prejudice or indifference. We will share the earth's resources with various people living in various regions of the world, and envision a future where we can continue our colorful work "QOL, Resilience, and Sustainability".

#### Short bio:

International Cooperation and Development Consultant, also an Occupational Therapist

What is an international development consultant? Work to conduct research, make plans, administer, and evaluate projects for international cooperation.

Born in Sapporo, Hokkaido, Japan.

Completed master's program in occupational science at Sapporo Medical University in 2001

Worked as an OT for adult physical disability in general, acute phase stroke recovery, children (cerebral palsy), elderly, and home visits

She has worked as a JICA expert in the field of health and disability assistance in the Philippines, Kyrgyzstan, Pakistan, Egypt, Myanmar, and Iran, and has conducted research, planning, and implementation of projects as a planning researcher.

She is currently working on a project to secure water resources and raise public awareness in Pakistan and supporting Afghan refugees in Iran.

## WFOT: 作業的ナラティブデータベースプロジェクトと作業理解

近藤 知子

杏林大学保健学部作業療法学科

### 【ワークショップの目的】

「人が日常生活で行うこと (doing)や、存在すること(being)」は、作業療法士が最も関心を寄せる領域の一つです。WFOT は、現在、作業的ナラティブデータベースプロジェクト(Occupational Narratives Database Project)として、作業療法士・作業療法学生の協力のもと、人が日常的に行うことの映像と語りのショートビデオを集め、世界作業療法士連盟のオープンアクセス資料としてデータベース化するプロジェクトを行っています。データベースを通し、世界中の人の作業について、その作業独自の文脈や個人個人の意味を知ることができます。本ワークショップでは、このプロジェクトを紹介し、参加者の皆さんに自分の作業の振り返りを行っていただくことで、作業の理解を深めることを目的とします。また、興味のある方に対しては、作業ナラティブデータベースプロジェクトへの参加の方法をお伝えします。

### 【ワークショップの定員】

制限はありません

### 【ワークショップの概要】

ワークショップは、まず、WFOT の作業的ナラティブデータベースプロジェクトの概要および、作業療法士、学生、研究者がこのデータベースをどのように活用し得るかを、WFOT が作成したビデオ映像を用いながら説明します。次いで、世界の作業療法士、作業療法学生が作成したショートビデオを紹介し、作業を見つめるにあたってのポイントを説明します。説明をもとに、自分の日常生活における作業の振り返りを行い、その後グループに分かれて、自分の作業についての説明・質疑応答をすることで、自らおよび他者の作業理解を深める経験をします。最後に、再び、全体で集まり、WFOT プロジェクトに参加し、自分の作業的ナラティブのショートビデオをデータベースに掲載することを希望する方には、ビデオ作成の具体的なコツ、掲載の方法についてお伝えします。ワークショップの時間は、60分から90分を希望します。

### 【ワークショップに必要なもの】

自分にとって意味のある作業の写真を携帯やコンピュータなどに入れてご準備いただくと、振り返りやグループワークが実施しやすくなります。



## 作業的写真プロジェクトの改善

小田原 悦子, 鴨藤 菜奈子, 馬場 博規, 鹿田 正隆

ウチソト勉強会

作業は日常の状況や人生の中に潜み変化する。複雑で目に見えない。そのために、その理解は難しい。作業の理解を促す目的で、写真と会話を使って、身近にある作業の形態、作業の機能、作業の意味に焦点化した作業の見方を「作業的写真」プロジェクトという名称で、学生や臨床家を対象に紹介してきた(小田原, 2012;2015)。作業に現れるその人らしさ、その作業の力強さ、日常生活に溶け込んでいることは理解しやすくなったが、半面、作業と健康やウェルビーイングがどのようにかかわっているのかが、把握しにくいことがはっきりしてきた。

今回、作業的写真プロジェクトを改善したので、本企画で報告する(小田原, 2021)。写真を共有しながら、会話を交わし、作業の話を傾聴し、日常にある作業の形態、機能、意味を明確にし、作業と健康やウェルビーイングへの効果を理解するという方向はそのままである。今回の改善点は、「作業的存在としての人間のモデル」(Clark,1993,p.51)を使って、作業の見方の理論的基盤を論じた点である。それを踏まえて、作業の形態、作業の機能、作業の意味を日常生活や人生のレベルでわかりやすく語り直し、実際のケースを多数紹介した。

【ワークショップの目的】改善した「作業的写真」プロジェクトを紹介する。作業の見方の理論的基盤を明確に提示し、わかりやすく解説する。参加者には演者が準備した写真とインタビューを使って、作業の見方に取り組んでいただく予定である。

【ワークショップの定員】20 人まで。

【ワークショップの概要】

1. 本プロジェクトの改善点、作業科学に理論的基盤を置いた「作業の見方」の解説
2. 写真と話を使ったプロジェクトの実演
3. 参加者は提示される話を使ってプロジェクトを経験する

【ワークショップに必要なもの】準備として、演者の近著(下記)を一読いただければ、ワークショップの理解が深まりますので、お勧めします。

他のウチソト勉強会のメンバーにも協力頂いた。深謝する。

### 引用文献

Clark, F. (1993). Developing an academic discipline: The science of occupation. In H. Hopkins & H. Smith (Eds.), Willard and Spackman's Occupational Therapy(pp.44-57). Philadelphia: Lippincott.

小田原悦子(2012).日常生活における作業的存在の写真:身近な作業を理解するために.作業科学研究,6,46-47,2012.

小田原悦子(2015).作業の視点を磨く～臨床で働く作業療法士のための作業的写真ワークショップ～.日本作業療法学会抄録集 49:80-80,2015.

小田原悦子(2021)作業を基盤に、我々の健康と幸福を考える「作業的写真」プロジェクトとは.幻冬舎.

## 作業レコードを使ってみよう

高木 雅之  
県立広島大学

### 【ワークショップの目的】

1. 作業レコードの基本的な使い方や作業療法への応用方法を理解すること
2. 実際に作業レコードを使ってみて、作業経験を共有すること
3. 作業レコードの可能性を検討すること

### 【ワークショップの定員】

30 名

### 【ワークショップの概要】

作業レコードは、「血圧を血圧計で測るように、作業を自分で簡単に測りたい」と思い、開発しました。作業レコードは、日々の生活に埋め込まれた作業に焦点を当て、作業経験をセルフモニタリングするためのツールです。作業レコードを使うことで、普段何気なく行っている作業の大切さに気づくことができます。そして、自分にとって大切な作業は何か、その作業の意味は何か、自分が大切にしたい作業観はどのようなものかに気づききっかけになります。

作業レコードは一人で使用することもできますし、集団で使用することもできます。集団で作業レコードを使うことで、作業経験を他者と共有することができます。作業経験を共有することは、お互いを理解し、関係を深めることに繋がります。

2019 年には、地域在住の健康な高齢者 125 名を対象に、集団で作業レコードを使用し、作業経験を他者と共有するプログラムの効果を検証するランダム化比較試験を行いました。その結果、プログラムに参加した群の作業満足度、生活満足度、生きがい感が、プログラムに参加していない群と比較し、有意に向上していました(高木他, 2020)。

今回のワークショップでは、作業レコードの基本的な使い方や作業療法に応用したプログラムを紹介します。そして、実際に作業レコードを使ってみて、参加者同士で作業経験を共有する体験もできればと考えています。ワークショップを通じて、作業レコードの新たな可能性が見つかることを期待しています。

### 【ワークショップに必要なもの】

参加登録者の方には作業レコードを事前に配布しますので、1 週間程度使用してからワークショップに参加していただくと、グループワークがやりやすくなります。

### 【文献】

高木雅之,其阿弥成子,織田靖史,ボンジェ ペイター(2020). 活動日記を用いた集団プログラムが地域在住高齢者の作業に対する満足度に与える効果ーランダム化比較試験ー. 作業療法, 39(4), 301-310.

## 一般演題 第1部

10月23日(土) 13:30～14:30

司会進行：中越 雄也（四国中央医療福祉総合学院）

---

1-1 精神疾患を持つ人の配偶者が経験する日常生活の変化と必要な支援

前田 直 杏林大学

---

1-2 部活動としてのeスポーツを通じた高校生の主観的経験

高木 雅之 県立広島大学

---

1-3 作業バランスの定義に共通する要素

山根 奈那子 県立広島大学

---

1-4 自閉症児と家族の食事時間

大谷 真寿美 児童発達支援センター カナの家

---

## General Sessions Part 1

Oct. 23<sup>th</sup> (Sat) 13:30～14:30

Chairperson: Yuya Nakagoshi (Shikoku-chuo Medical&welfare General Collage)

---

1-1 Daily life changes experienced by spouses of people with mental illness  
and necessary support

Sunao Maeda Kyorin University

---

1-2 High school students' subjective experiences through e-sports as a club activity

Masayuki Takagi Prefectural University of Hiroshima

---

1-3 Common factors in the definition of occupational balance

Nanako Yamane Prefectural University of Hiroshima

---

1-4 Mealtime for Autistic Children and Their Families

Masumi Otani Child Development Support Center Kana no Ie

---

## 一般演題 第2部

10月23日(土) 14:45~15:45

司会進行: 安田 友紀 (ヴァンサンク ポルテ)

---

2-1 精神科病院における依存症患者に対する作業を中心にした個別プログラムの効果検討  
今元 佑輔 瀬野川病院

---

2-2 作業の意味を共有し心不全の自己管理が定着できた一例  
吉田 俊二 キナシ大林病院

---

2-3 OTIPMに基づき、家事の役割を獲得した事例  
大門 俊貴 令和リハビリテーション病院

---

2-4 農業からの引退: OT が関わった高齢障害男性の作業的移行  
齋藤 駿太 済生会小樽病院

---

## General Sessions Part 2

Oct. 23<sup>th</sup> (Sat) 14:45~15:45

Chairperson: Yuki Yasuda (Vingt-cinq Porte)

---

2-1 A study on the effects of occupation-centered practice for individuals with addiction  
in a psychiatric hospital  
Yusuke Imamoto Senogawa Hospital

---

2-2 A case in which self-management of heart failure was established  
by sharing the meaning of occupation  
Shunji Yoshida Kinashiobayashi Hospital

---

2-3 A case study of regaining partial independence in housework based on OTIPM  
Toshiki Daimon Reiwa Rehabilitation Hospital

---

2-4 Retirement from agriculture: Occupational transition of older men involved  
in occupational therapy  
Shunta Saito Saiseikai Otaru Hospital

---

## 精神疾患を持つ人の配偶者が経験する日常生活の変化と必要な支援

前田 直, 近藤 知子

杏林大学保健学部作業療法学科

【はじめに】精神疾患の罹患者数は増加の一途を辿っているが、薬物療法の発展、リハビリテーションに関わる施設や人員の増加、精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築などにより、自立して、または家族とともに地域で生活する人が増えている。家族の中でも、精神疾患を持つ人を夫や妻とする配偶者は、出産、育児、転居など、生活上の様々な困難や悩みを経験する。しかし、配偶者がどのような日常生活を送り、どのような困難・悩み・不安を抱えているか、また、どのような喜びや楽しみを見出しているかは明らかではない。精神疾患とともに地域で生活する人の配偶者の日常生活上の経験を明らかにすることは、配偶者の支援に役立ち、ひいては精神疾患を持つ人が家族とともに地域で質の高い生活を送ることを支援することにもつながる。そこで本研究では、精神疾患を持つ人の配偶者がどのような負担や困難を抱えているか、どのような喜びを感じているかを、日常生活作業に焦点を当てながら明らかにすることを目的とする。

【方法】本研究は、質的記述的研究であり、精神疾患を持つ人の配偶者に対し半構造化面接を実施した。対象者は、配偶者支援に取り組む2つの家族会の参加者から便宜的にサンプリングした10名で、1人1回60分～90分程度、年代、職業歴、精神疾患を持つ人の疾患名などの一般情報、日常生活やライフイベントにおける困りごとや支援ニーズ、自身が大切にしたり喜びを感じたりすることについて聞いた。筆頭著者はインタビューデータを逐語録化した後、意味のまとまりごとに概念を形成し、概念間の関係を見ながらカテゴリを抽出した。研究の厳密性を高めるために研究者はデータを熟読し、概念およびカテゴリの編成・再編成を繰り返した。また、解釈の偏りを防ぐために、研究に直接関与しない作業科学分野の研究者や障害者家族と接点を持つ作業療法士と定期的なピア・ディブリーフィングを行った。本研究は杏林大学保健学部倫理委員会の承認を得て実施した(承認番号 2019-6)。

【結果】対象者の経験から、以下の10のカテゴリが抽出された。1)元に戻せる、何とかかなと思う、2)生活が崩壊してしまうようなひどい状態を経験する、3)助けてくれる人がみつからず、孤立する、4)先が見えない、つらい気持ちが続く、5)一旦休んで仕切りなおす、6)役割を分担したり、引き受ける、7)助けてくれる人がみつかる、8)病気があっても家族を大切に思う、9)自分の時間を大切にする、10)生活を豊かにするために望むこと。

【考察】対象者はいずれも、精神疾患を持つ配偶者を気にかけ、お互いにとってより良い生活について模索しつつも、配偶者の病状や生活障害に影響を受け、困難さや大変さを経験していた。対象者の中には、自身の生活や家族の生活を安定させるために、様々な試みをしている人がいる一方、配偶者との生活や関係をどのように構築するかに悩み、将来に不安を抱えている人もいた。全ての対象者が生活を維持するために、自分の時間を大切にしようとしていた。精神疾患を持つ人が地域で質の高い生活を送ることを支援するためには、配偶者の日常生活上の困難さや喜びの理解を含め、家族全体を支えるという視点が必要である。

【謝辞】本研究は JSPS 科研費 JP19K19803 の助成を受けたものです。

# Daily life changes experienced by spouses of people with mental illness and necessary support

Sunao Maeda, Tomoko Kondo

Kyorin University Department of Occupational Therapy Faculty of Health Sciences

**【Introduction】** Along with the increase of people with mental illness, a growing number can live in the community either independently or with family. Among family members, husbands and wives of people with mental illness experience a variety of difficulties in life during childbirth, parenting, moving home, and other life events. Despite this, studies have not clarified how spouses are living, what difficulties and worries they experience, and where they find joy and pleasure. Understanding the daily experiences of spouses of people with mental illness can aid in support for spouses and lead to assistance for people with mental illness to live high quality lives in the community. We therefore aimed to determine the burdens and difficulties as well as the joys that spouses of people with mental illness experience, with a focus on daily life.

**【Methods】** In this qualitative descriptive study, semi-structured interviews were held with spouses of people with mental illness. From two family association groups, 10 people were recruited through convenience sampling. Each subject was interviewed for 60 to 90 minutes, and they were asked what difficulties they experience in day-to-day life and during life events, what support they need, and what they consider important or find joyful. The interview data was transcribed, formed concepts, then categorized while examining the relationships among concepts. Peer debriefings were conducted regularly in order to prevent interpretation bias. The study was approved by the ethics committee (Kyorin University, approval no. 2019-6).

**【Results】** The following 10 categories were identified from the subjects' experiences. (1) Thinking that they can return to normal or do something about the situation, (2) experiencing terrible situations that destroy their daily life, (3) feeling alone with no one to help them, (4) continuing awful feelings of uncertainty about the future, (5) taking a break to regroup, (6) dividing and taking on responsibilities, (7) finding people who can help, (8) cherishing family even when they are sick, (9) cherishing personal time, and (10) hoping to enrich their daily life.

**【Discussion】** All subjects cared their spouses with mental illness and sought a better life for themselves and their spouses. Simultaneously, the subjects were affected by their spouse's condition and daily life impairments and experienced difficulties. While some subjects made various attempts to bring stability to their own life and their family members' lives, others worried about how to build their life and relationship with their spouse and felt anxious about the future. All subjects tried to cherish their personal time so that they could maintain day-to-day life. To support people with mental illness and enable them to live high quality lives in the community, it is important to support their whole family, for example by understanding the difficulties and joys their spouses experience in daily life.

**【Acknowledgment】** This work was supported by KAKENHI (JP19K19803) .



## 部活動としての e スポーツを通じた高校生の主観的経験

高木 雅之  
県立広島大学

【はじめに】近年、e スポーツを部活動に取り入れる高校が増加している。一方で、e スポーツを教育現場で活用することに根強い反発もある。e スポーツを部活動として取り入れるか否かを議論するためにも、e スポーツ部に所属する高校生の主観的経験は重要である。

【目的】本研究の目的は、e スポーツ部に所属する高校生在 e スポーツを通してどのような経験をしたかを探索することである。

【方法】対象者は、全日制の A 高校の e スポーツ部の部員とした。この e スポーツ部は 2020 年 6 月に立ち上げられた。部として取り組むゲームタイトルは League of Legends (以下、LOL) であった。研究の目的や方法などを説明し、部員全員から研究協力の同意を得た。部員は 7 名で、全員が男性で、うち 4 名が 2 年生、3 名が 1 年生であった。入部してからの期間は 3～8 カ月であった。

データ収集のため半構造化面接を 2020 年 12 月～2021 年 3 月に実施した。面接では、「部活動の中で一番印象に残っていることは何か」、「e スポーツは自分や生活にどんな影響を与えていると感じるか」などを質問した。面接中の会話は IC レコーダーで録音し、逐語録を作成した。面接の実施時間は平均±標準偏差で 42.7±11.7 分であった。

データは、テーマ分析を用いて質的帰納的に分析した。手順としては、逐語録を 1 文ずつ区切り、コードを付けた。その後、意味が類似するコードをまとめてテーマとして抽出し、テーマの関係性を検討した。

【結果】結びつきの基盤、強まる結びつき、精神的成長の機会、生活リズムの調整、高校生活への適応という 5 つのテーマが抽出された。

1. 結びつきの基盤: 対象者は元々、ゲームへの興味を持ち、運動や人付き合いに苦手さを感じていた。また家族やコーチから理解や応援を受けながら、高校が認める部活動として練習していた。彼らがプレイをする LOL では精神的なタフさやチームメイトとの連携が求められた。
2. 強まる結びつき: 彼らは目標を持ち、部活動の時間以外にも意欲的に練習し、LOL の知識と技能を高め、ゲームに精通していった。また、チームメイトと良好な関係を築き、力を合わせて勝利する喜びや困難に挑戦する面白さを味わっていた。時には、ゲームのやりすぎによって体の不調を感じていた。
3. 精神的成長の機会: 彼らはプレイにおいて不利な状況でも諦めず、冷静に分析・判断し、行動しようと心がけていた。またチームメイトとコミュニケーションをとる大切さを実感し、他者に配慮して意識的にコミュニケーションをとっていた。これらの経験を通して自分への自信を高めていた。
4. 生活リズムの調整: 彼らは部活動に参加するようになり、家で過ごす時間が短くなった。その分、家でダラダラする時間を減らし、やるべきことを効率よく行い、ゲームの時間と就寝時間を調整していた。
5. 高校生活への適応: 彼らは部活動以外にも家族や友達と交流することが増えていった。また部活動が高校生活における気分転換や楽しみになり、登校への消極的な気持ちを軽減し、勉学を促進するように作用していた。

【考察】e スポーツは、高校生にとって結びつきの強い部活動としての作業となることで、主体的に活動する場や他者と親密な関係を築く場として機能し、高校生活へのコミットメントを促進することが示唆された。

## High school students' subjective experiences through e-sports as a club activity

Masayuki Takagi

Prefectural University of Hiroshima

**【Introduction】** In recent years, an increasing number of high schools have incorporated e-sports into their club activities. The subjective experiences of high school students who belong to e-sports clubs are important to discuss whether eSports should be incorporated as a club activity or not.

**【Purpose】** The purpose is to explore what experiences the e-sports club members had through e-sports.

**【Methods】** The subjects were members of an e-sports club at a full-time high school. The e-sports club was launched in June 2020. The game title to be played by the club was League of Legends (LOL). The research was explained, and all club members consented to research cooperation. There were 7 members, all males, 4 of whom were in the second grade and 3 of whom were in the first grade. The period of time since they joined the club ranged from 3 to 8 months.

Semi-structured interviews were conducted from December 2020 to March 2021. The questions were "What was the most memorable experience in the club activities?", "How do you feel e-sports has influenced you and your life?", et al. Conversations during the interviews were recorded with an IC recorder, and verbatim transcripts were made. The interview duration was  $42.7 \pm 11.7$  minutes.

The data were analyzed qualitatively and inductively using thematic analysis. Each sentence in the verbatim transcripts was separated and coded. The codes with similar meanings were grouped and extracted as themes, and the relationships between themes were explored.

**【Results】** Five themes were identified: the foundation of engagement, strengthening engagement, opportunities for mental growth, adjusting the life rhythms, and adopting to high school life.

1. The foundation of engagement: The subjects originally had an interest in games and felt uncomfortable with existing sports and socializing. They were practicing as a club activity recognized by their high school while receiving understanding and support from their families and coaches. The LOL required them to be mentally tough and to collaborate with their teammates. 2. Strengthening engagement: They had goals and practiced outside of club hours, improved their knowledge and skills in LOL, and became familiar with the game. They also developed good relationships with their teammates and experienced the joy of challenge and winning by working together. At times, he felt physically ill from playing too many games. 3. Opportunities for mental growth: They tried to analyze, judge, and act calmly without giving up even in unfavorable situations. They also realized the importance of communicating with their teammates and communicated with consideration for others. Through these experiences, they increased their self-confidence. 4. Adjusting the life rhythm: As they started to participate in club activities, the time they spent at home became shorter. Therefore, they spent less time lazing around at home, did efficiently what they had to do, and adjusted their game time and bedtime. 5. Adapting to high school life: They interacted more with their family and friends outside of club activities. The club activities became an enjoyment and diversion source in their school life, reduced their reluctance to attend school, and promoted their studies.

**【Discussion】** By becoming an occupation that high school students engaged in as a club activity, e-sports may serve as a place to take initiative and build close relationships with others, thus promoting commitment to school life.

## 作業バランスの定義に共通する要素

山根 奈那子, 吉川 ひろみ

県立広島大学

【はじめに】健康的な生活のために作業バランスが重要であると指摘されているが、複数の研究者による統一された定義はない(Wagman, 2011)。

【目的】本研究の目的は、作業バランスの定義に共通する内容を明らかにし、作業バランスにおいて重要となり得る視点を切り開くことである。

【方法】作業バランスに関連する定義や概念、測定法を定めている文献 12 件から、その内容において共通する要素を抽出した。文献は、a. Christiansen(2006), b. Dur(2014), c. Eakman(2015), d. Håkansson(2006), e. Matuska(2008), f. Meyer(1922), g. Pentland(2008), h. Pierce(2003), i. Townsend(2004), j. Wagman(2011), k. Wilcock(2015), l. 吉川(2008)である。

【結果】各論文において記載されていた作業バランスに関連する内容で共通したのは、作業の量、作業の種類、自身の価値観との合致、作業バランスの結果の4要素だった。文献と各要素の内容を以下に示す。

作業の量に言及した文献は 2 件(i, j)あった。行うべき作業数に対する主観的評価、いくつかの作業の種類ごとに費やす時間への主観的評価が含まれていた。作業バランスの不良は、無作業、多すぎ、少なすぎの状態として理解するという指摘があった。

作業の種類については 7 件(b, d, f, h, j, k, l)あり、区分法は多様だった。仕事・生産活動・遊び・余暇・休息・睡眠など領域的区分の他に、個人・共同、挑戦的・リラックス、義務・願望などの区分があった。こうした区分を使って、作業バランスを理解しようという試みだった。

自身の価値観との合致については 5 件(c, d, e, g, h)あり、価値観や目的に合致し、ニーズを充足し、強みを生かすなど意味を含む作業を行うことが良好な作業バランスをもたらすという指摘があった。

作業バランスの結果に着目している文献は 6 件(a, c, d, e, f, k)あり、良好な作業バランスがストレスを軽減し健康と幸福を向上させるという指摘があった。生活や人生を満足させているなら、その作業バランスが良好であるという見方だった。

【考察】作業バランスの定義には 4 要素あることがわかった。この 4 つの視点は、作業バランスを考慮する際の指針となると考えられる。作業的不公正の形態の一つである作業不均衡は作業の量の問題と捉えられていることから、作業の量を考えるためには作業的公正のイメージである個人と社会のバランスの視点が必要となる。もっとも多く言及されていたのは、作業の種類であるが、区分法は多様であり、作業バランスを考えるために適切な区分について、さらに研究が必要である。自身の価値観との合致や結果に着目する作業バランスの見方は、近年作業の個人的意味が重視されていることの反映かもしれない。

【文献】Wagman P, et al. (2011). Occupational balance as used in occupational therapy. A concept analysis. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*. 19(4):322-327

## Common factors in the definition of occupational balance

Nanako Yamane , Hiromi Yoshikawa  
Prefectural University of Hiroshima

【Introduction】 Occupational balance has been noted as important for a healthy life, but there is no uniform definition by multiple researchers (Wagman, 2011).

【Purpose】 The purpose of this study is to clarify the common factors in the definition of occupational balance and to open up a perspective that may be important in occupational balance.

【Methods】 We extracted common factors in the content of 12 references that provide definitions, concepts, and measurement methods related to occupational balance. References are shown in the following literature: a. Christiansen (2006), b. Dur (2014), c. Eakman (2015), d. Håkansson (2006), e. Matuska (2008), f. Meyer (1922), g. Pentland (2008), h. Pierce (2003), i. Townsend (2004), j. Wagman (2011), k. Wilcock (2015), l. Yoshikawa (2008).

【Results】 Four factors were common in the literature related to occupational balance: the amount of occupation, type of occupation, congruence with one's own values, and the consequences of occupational balance. The reference literatures and the contents of each element are listed below.

There was two references that referred to the amount of occupation (i, j). They included a subjective assessment of the number of occupation to be performed and a subjective assessment of the time spent on each of several occupation categories. It was pointed out that work imbalance is understood as un-occupied, under-occupied, or over-occupied. There was seven references on type of occupation (b, d, f, h, j, k, l), and the classification methods were diverse. In addition to domain-based classifications such as work, productive activity, play, leisure, rest, and sleep, there were also classifications such as individual or collaborative, challenging or relaxing, and duty or desire. It was an attempt to understand the occupational balance using these classifications. There was five references on the congruence with one's own values (c, d, e, g, h). It was pointed out that meaningful occupations that meet individual values and objectives, satisfies needs, and utilizes strengths will bring about a good occupational balance. There was six references that focused on the occupational balance results (a, c, d, e, f, k), pointing out that a good occupational balance reduces stress and improves health and well-being. The view is that if you are satisfied with your life and living, then you are in a good state of occupational balance.

【Discussion】 The four factors can be considered as a guideline when considering occupational balance. Occupational imbalance is one of the forms of occupational injustice. Therefore, a social perspective is necessary to consider the quantity of occupation. The most frequently mentioned topic was type of occupation. Further research is needed on the appropriate classification for considering occupational balance. The view of occupational balance that focuses on conformity with one's own values and results may be a reflection of the recent emphasis on the personal meaning of occupation.

【Reference】 Wagman P, et al. (2012). Occupational balance as used in occupational therapy. A concept analysis. *Scandinavian Journal of Occupational Therapy*. 19(4):322-327.

## 自閉症児と家族の食事時間

大谷 真寿美

児童発達支援センター カナの家

### 【はじめに】

食事は日々の生活において毎日繰り返される重要な作業である。また生後 100 日目に行うお食い初めに始まり、人生の節目となる出来事には家族や親しい人達との食事は欠かせない大事な作業であり、その積み重ねが各家庭の文化となる。しかし、自閉症児は感覚の特異性やこだわりなどの特徴があり、食べる事に問題を持つ児が多く、自閉症児を持つ保護者は、日々の毎回の食事に困り感を感じている。そこで、本研究では自閉症児と家族の食事に着目し、食事の意義と自閉症児を持つ保護者の食事の困りごとに対する対策を明らかにする目的で文献レビューを行った。

### 【方法】

データベース(J-STAGE, 医中誌, Pub Med)とハンドサーチを用いて文献検索を行った。自閉症, 食事時間, 食事の意義, Autism, mealtime, strategy を主なキーワードとした。その中から自閉症児の食事とその対策に関連のある 15 の文献を抽出し内容をレビューした。

### 【結果】

15 の文献は、①食事の意義と母親の療育態度の関係に関する文献(3 文献)、②食事の問題に関する文献(4 文献)、③自閉症児の食事への対策に関する文献(8 文献)に分類された。①では、食事は単に栄養を摂る「生物学的意義」だけでなく美味しい、楽しいと言った充足感、食事を介しての家庭・社会とのつながり、自分自身を大切にしたい、大切にされているという自尊感情を得るという「社会的な意義」がある。母親の療育態度の違いにより子供の食行動が異なる、母親の食育への関心の有無が子どもへの療育態度を反映していると示唆されていた。②では、保護者が捉える食行動の問題数は 1 人平均  $2.43 \pm 2.26$  個で男女ともに 4 割が偏食、3 割がじっとしていられないであった。すべての子どもの約 4 分の 1 が生後 1 年間に食べる事の問題を抱えるが発達障害を持つ子どもの割合は 80%にも上回っていた。③では、自閉症児は偏食、不器用・マナー、食への関心・集中、口腔機能、過食など食べる事に問題を持つ児が多い。自閉症児の食事には具体的な対策が必要であり、具体的な対策が摂取量や食行動に効果がある。具体的な対策には「好きな食材を出す」、「児の特徴を理解する」、「無視」、「準備」、「気晴らし」、「遊び」、「正の強化」、「モデリング」、「小道具の使用」などがあった。自閉症児の食事の対策は、食べ物の受け入れだけでなく家族の調和と団結を促進する事を提供すると書かれた文献があったが、その具体的対策は示されていないかった。

### 【考察】

作業には、機能、形態、意味がある。今回の文献の多くが自閉症児の食物の摂取量と種類を増加させる為の対策であり食事の機能に焦点が当たっていると言える。誰と、どこで、どんな時に食事するかなど食事の形態や家族にとっての食事の意味への対策はなかった。今後、食事を自閉症児と家族の重要な作業として捉え、単なる食べる事だけではなく、形態、意味を考慮した食事の時間として具体的対策を検討する必要がある。

### 【文献】

吉川ひろみ、「作業」って何だろう—作業科学入門第 2 版・医歯薬出版・2017

## Mealtime for Autistic Children and Their Families

Masumi Otani

Child Development Support Center Kana no Ie

**【Introduction】** Eating is an important daily occupation in our lives. Starting with the first meal, meals with family and close friends are an important and indispensable part of life, including milestone events, and the accumulation of these meals becomes the culture of each family. However, autistic children are characterized by sensory specificity and fixation, and many of them have problems with eating. In this study, I focused on the meals of autistic children and their families and conducted a literature review with the aim of clarifying the significance of meals and measures for dealing with the meal problems of parents with autistic children.

**【Methods】** I conducted a literature search using databases (J-STAGE, Medical Journal, Pub Med) and manual search. The main keywords were autism, mealtime, significance of meals, and strategy. Fifteen articles related to autistic children's diets and strategies were extracted from the literature and their contents reviewed.

**【Results】** The fifteen references were categorized into: ① relationship between the significance of meals and parenting attitudes (3 references), ② dietary problems (4 references), and ③ measures to deal with the diets of autistic children (8 references). ① Eating has not only a biological significance of nourishment, but also a social significance of enjoyment, connection with family and society, and realizing the importance of self-care. It was suggested that the eating behavior of the child differs depending on the mother's attitude and that the mother's interest in dietary education reflects the child's attitude. ② The average number of eating problems per child was  $2.43 \pm 2.26$  with 40% of all children were picky eaters and 30% were unable to sit still. About a quarter of all children had eating problems in the first year of life and the percentage of children with developmental disabilities was higher than 80%. ③ Many autistic children have problems with eating such as picky eating, clumsiness, manners, interest in and concentration on food, oral function, and overeating. Specific measures are necessary for autistic children to eat, and they are effective in terms of intake and eating behavior. Specific measures included serving favorite foods, understanding the child's characteristics, ignoring, preparation, distraction, play, positive reinforcement, modeling, and use of props. Some references stated that measures for feeding autistic children would provide not only acceptance of food, but also promote family harmony and unity, but no specific measures were given.

**【Discussion】** Occupation has function, form, and meaning. Most of the literature presented here focuses on measures to increase the amount and variety of food intake of autistic children, and it can be said that the focus is on the function of eating. In the future, it will be necessary to view meals as an important occupation for autistic children and their families, and to consider specific measures for meal times that take into account not only eating, but also form and meaning.

**【Reference】** Yoshikawa, H. (2017). What is "Occupation" - An introduction to occupational science, (2nd Edition). Medical and Dental Publishing.

## 精神科病院における依存症患者に対する作業を中心にした 個別プログラムの効果検討

今元 佑輔, 徳光 謙一, 谷口 鷹史, 永井 美咲, 津久江 亮太郎  
医療法人せのがわ 瀬野川病院

### 【はじめに】

近年、「アルコール健康障害対策基本法」や「ギャンブル等依存症対策基本法」が施行されるなど依存症への関心が高まっている。依存症の症状として問題となる「飲酒をする」、「ギャンブルをする」、「ゲームをする」といったことは人が生活の中で行う作業の一部であると捉えると作業を通してクライアント（以下 CL）の健康と安寧を促進する保健の専門職である作業療法士に出来ることがあるのではないかと考える。当院では、CLにとって重要な作業を中心にした個別プログラムを実施しており、今回はそのプログラムに参加したクライアントの実践を振り返りながら依存症治療における作業療法士の役割と依存症治療の新たな可能性を考察したいと考える。

### 【目的】

精神科病院に入院している依存症患者に対して作業中心の個別プログラムを実施することがどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とする。

### 【方法】

2018 年 1 月から 2021 年 3 月までの期間に作業中心の個別プログラムに参加した依存症が主病名の CL との取り組みを振り返り考察する。COPM, AMPS, ESI といった作業療法の評価と終了時のアンケートを客観的な評価と主観的な評価として活用する。全ての評価結果について、介入前後で比較した。統計手法は Wilcoxon の符号付順位和検定を用いた。統計ソフトは、EZR (Saitama Medical Center, Jichi Medical University, Saitama, Japan)を用いて、有意水準は危険率 5%とした。研究にあたって、瀬野川病院倫理審査委員会の承認(承認番号 R03-11)を得た。

### 【結果】

研究対象者は 10 名、男性 6 名、女性 4 名、平均年齢は 49.2 歳±14.78 であった。個別プログラム実施前後を比較すると、COPM の遂行度( $p=0.009$ )、COPM の満足度( $p=0.006$ )、ESI( $p=0.032$ )において有意な改善が認められた。10 名全員が退院し、うち 6 名が現在(2021 年 4 月時点)まで地域生活を継続している。プログラムに関する評価をインタビューにて聴取すると、①話ができる、②気付きを得る、③今後に繋がる、④自身が変わるという 4 つのカテゴリーが語られた。

### 【考察】

作業を中心にした個別プログラムは、CL の主観的な作業遂行度と満足度、社会交流技能の向上に効果がある可能性が示唆された。また、CL に前向きな変化をもたらし、地域生活継続の一助となる可能性が示唆された。精神科領域の作業療法において、作業を中心にした実践に挑戦していくことは、CLにとって人、環境、作業と“繋がる”きっかけ作りになるのではないかと考える。

### 【文献】

World Federation of Occupational Therapists. About Occupational Therapy. <<https://www.wfot.org/about/about-occupational-therapy>> 参照日 2021.6.1.

## **A study on the effects of occupation-centered practice for individuals with addiction in a psychiatric hospital**

Yusuke Imamoto, Kenichi Tokumitsu, Takafumi Taniguchi, Misaki Nagai, Ryotaro Tsukue  
Senogawa Hospital

### **【Introduction】**

In recent years, interest in addiction has increased. The problematic symptom of addiction can be regarded as a part of the occupation that a person does in his or her life. Thinking that way, I think there is something that an occupational therapist can do. At our hospital, we carry out individual programs focusing on occupations that are important to our clients. We would like to look back on the practices of the clients who participated in the program and consider the role of occupational therapists in the treatment of addiction and the new possibilities of addiction treatment.

### **【Purpose】**

The purpose of this study is to clarify the impact of implementing occupation-centered individual programs on addicted patients admitted to psychiatric hospitals.

### **【Methods】**

Compare before and after the program. Performance indicators are COPM, AMPS, and ESI. In addition, a questionnaire will be conducted after the completion.

### **【Results】**

The subjects of the study were 10, 6 males, and 4 females. The average age was 49.2 years  $\pm$  14.78. Comparing before and after the program implementation, significant improvements were observed in COPM performance ( $p = 0.009$ ), COPM satisfaction ( $p = 0.006$ ), and ESI ( $p = 0.032$ ). When listening to the evaluation of the program in an interview, four categories were mentioned: (1) being able to talk, (2) getting noticed, (3) connecting to the future, and (4) changing oneself.

### **【Discussion】**

It was suggested that individual programs centered on occupation may be effective in improving the client's subjective occupation performance and satisfaction, and social exchange skills. It was also suggested that it may bring about positive changes in the client and help the continuation of community life. I think that an occupation-centered individual program may be an opportunity for the client to "connect" with people, the environment, and occupation.

### **【Reference】**

World Federation of Occupational Therapists. About Occupational Therapy. <<https://www.wfot.org/about/about-occupational-therapy>> Reference date 2021.6.1.



## 作業の意味を共有し心不全の自己管理が定着できた一例

吉田 俊二<sup>1)</sup>, 山地 早紀<sup>1)</sup>, 中越 雄也<sup>2)</sup>

1) キナシ大林病院, 2) 四国中央医療福祉総合学院

【はじめに】心不全患者は寛解と増悪を繰り返し再入院となることで、クライアントにとって住み慣れた場所や、大切な作業から引き離されてしまいやすい。再入院を予防するために心不全の自己管理を教育するが、継続して行えていない事例に出会うことが多い。今回、心不全増悪で入院したクライアントと作業の意味を共有することで、心不全の自己管理が退院後も長期間に渡って継続した事例について報告を行う。発表に際し、対象者からは書面にて同意を得ている。

【事例紹介】A氏は80台後半の女性で一人暮らしであった。同じ市内に住んでいる娘とは普段から連絡を取り合っている。娘は高齢となったA氏に対して同居を勧めているが、A氏は住み慣れた場所での生活を選び、娘から夜食の準備や通院などの援助を受けて生活していた。通所系のサービスは好まず、近所の人との井戸端会議を楽しみにしており、日中は家の周りの散歩や玄関前で座ることが日課となっている。10年前に心臓の手術を受け1年前より入退院を繰り返しており、半年前にも心不全の増悪にて2ヶ月ほど入院をしていた。今回の入院に至る経緯は「胸が苦しかった、動いたらしんどかった」と不調を感じながらも受診のタイミングを娘に任せており、心不全に対する病識が乏しかったことが分かった。

【介入・経過】心不全の自己管理の教育として心不全の病態を説明後に、心不全ノートを作成し血圧、脈拍、体重、倦怠感の有無、むくみの有無などを記載してもらった。入院当初は「そんなんでできない」「娘に任せとるけんな」との発言が聞かれ、自主的に行えなかった。そこで、A氏が大切にしている作業について話をした。心不全増悪により入院回数が増えることや入院の長期化に繋がり、A氏が大切にしている近所の方との関わりが減ってしまうことを伝え、大切にしている作業を維持するために自己管理は必要であることを説明した。説明を行った後より、セラピストが促すよりも前に心不全ノートへ血圧や体重の記録をしていることが増えていった。

【結果】約2ヶ月間の入院で自宅退院となった。退院後半年して脱水にて再入院となるも、心不全ノートを持参しており、記録ができていてことで状態の変化を確認することができた。その後、1年以上入院せずに自宅で過ごしている。

【考察】A氏は、退院後も心不全ノートの記録を続けて行っており、再入院のリスクを減らすことができたと考える。介入以前、心不全による体の不調をきたしながらも自己管理はA氏にとって意味のある作業にはなっていなかった。日々の近所の方との関わりを大切にしているA氏に対し住み慣れた場所で近所の方との会話を続けるための目的や手段として、心不全の自己管理をする作業の意味を共有した。そのことにより、心不全の自己管理をするという作業がA氏にとって意味のある作業となり、継続して取り組めることに繋がったと考える。

【文献】吉川ひろみ(2017). 作業の意味を考えるための枠組みの開発. 作業科学研究, 3, 20-28.

## **A case in which self-management of heart failure was established by sharing the meaning of occupation**

Shunji Yoshida<sup>1)</sup>, Saki Yamaji<sup>1)</sup>, Yuya Nakagoshi<sup>2)</sup>

1) Kinashiobayashi Hospital, 2) Shikoku-chuo Medical&welfare General Collage

**【Introduction】** In this study, we report a case in which self-management of heart failure continued for a long period of time after discharge by sharing the meaning of occupation with a client who was hospitalized for exacerbation of heart failure. We have obtained written consent from the subject for the presentation.

**【Case】** The case, Ms. A is a woman in her late 80s who lives alone. She has been in touch with her daughter, who lives in the same city. Her daughter recommended that the old Ms. A live with her, but she chose to live in a familiar place and received assistance from her in preparing evening meals and visiting the hospital. She does not like day-care services and enjoys small chit chat with her neighbors. During the day, her routine is to take a walk around her house or sit in front of the door. She felt unwell, saying, "My chest was painful, and it was tough to move," but she did not go to the hospital until her daughter urged her to do so. As a result of her medical examination, she was admitted to the hospital, and her hospitalization was prolonged because she could not voluntarily cope with the symptoms of heart failure.

**【Intervention & Progress】** After explaining the pathophysiology of heart failure, a heart failure notebook was given to Ms. A to record her blood pressure, pulse rate, weight, presence of fatigue, and degree of edema. At the beginning of the intervention, Ms. A said, "I can't do that," or "I'll leave it to my daughter," and could not take the initiative. We told her that exacerbation of heart failure would lead to increased and prolonged hospitalization, which would diminish her relationship with her neighbors, which she valued. Then we explained that self-management is necessary to keep occupation that is important to her. After sharing her occupation and its meaning, she began to voluntarily record more information in her heart failure notebook.

**【Results】** Ms. A was discharged home after about two months of hospitalization. Since then, she has been able to stay at home without being hospitalized for more than a year.

**【Discussion】** Although self-management by heart failure notebooks is important for heart failure clients to prevent rehospitalization, Mr. A was not able to keep a record at the beginning of the intervention. We assume that this is because the management of heart failure is something that his daughter does for her, and it was not a meaningful occupation for her. For Ms. A, who values daily interactions with her neighbors, we shared the meaning of her occupation so that self-management of heart failure would be a purpose and a means to continue conversations with her neighbors in a familiar place. In this process, self-management of heart failure became a meaningful occupation for Ms. A, and she was able to continue working on it.

## OTIPMに基づき、家事の役割を獲得した事例

大門 俊貴

令和リハビリテーション病院

【はじめに】今回、第3, 5腰椎圧迫骨折により歩行困難となったクライアント(以下 CL)を担当した。病前は夫の介助下で生活していたが、一部の家事はCLの役割であった。面接では、夫に全ての家事を任せ、負担をかけていると話し、家事の再獲得を希望した。作業療法ではOccupational Therapy Intervention Process Model(以下 OTIPM)に基づき介入し、部分的な家事が自立に至ったため以下に報告する。尚、発表に際して事例の承諾を得ている。

【目的】介助下の生活となるCLにOTIPMを用いることで、役割を獲得できる可能性を示す。

【方法】症例は80歳代女性である。現病歴はX年Y月Z日に転倒し、外来にて経過観察となるが、Z+76日に第3, 5腰椎圧迫骨折を認め、入院した。その後、Z+95日に当院へ転院となる。既往歴にパーキンソン病がある。病前は夫と2人暮らしで、入浴と段差昇降に夫の介助を要していた。要介護は3であり、週2回デイサービスを利用していた。お茶入れや皿洗いがCLの役割であったが、受傷後は全て夫が行っていた。初期評価(Z+96日)として、認知機能はMini-Mental State Examinationが22/30点、機能的自立度評価表(以下 FIM)は48/126点で食事と整容以外は最大介助レベルであった。カナダ作業遂行測定(以下 COPM)はお茶入れ(重要度/満足度/遂行度)7/2/5、食器洗い 3/5/5であり、家事を獲得し、夫の負担を減らしたいと発言が聞かれた。経過(Z+97-132日)として、OTIPMに基づき、Assessment of Motor and Process Skills(以下 AMPS)で、ポットで入れたお茶と食器を手で洗う課題を実施した(Z+110日)。運動技能 1.1 ロジット、プロセス技能 1.1 ロジットと運動技能がカットオフ値を下回った。お茶入れは、急須を持つときに努力が増大し、急須を違う作業場まで持ち運べなかった。食器洗いでは、シンクに左手をつき立位保持を行うため、食器を固定出来なかった。実施後の面接では、CLから作業の問題点や解決策について発言が聞かれ、目標をお茶入れと皿洗いが同じ作業場内で自立して行うとした。介入として、全てのモデルを選択し、回復モデルは、自宅や施設で行うアイロンがけやちぎり絵などを立位で行った。代償モデルでは、ポットの位置を同じ作業場内に変更し、急須を持ち運ぶ工程を省略した。習得モデルでは課題実施後に振り返りを行い、問題点の共有を行った。

【結果】最終評価(Z+133日)は、FIMは70/126点となり軽介助から見守りレベルとなった。AMPSは初期評価と同じ課題を実施し、急須を持つときの努力性の軽減や食器を両手で洗うことが可能となった。運動技能 1.7 ロジット、プロセス技能 1.7 ロジットと両技能ともカットオフ値を上回り、統計学的にも有意な改善を示唆していた。COPMはお茶入れ(遂行度/満足度)8/10、食器洗い 8/8と向上し、家でも出来ますと発言が聞かれた。退院後は、お茶入れは家具の配置を変更して自立、食器洗いは夫が食器をシンクまで運び、食器をCLが洗う予定となった。

【考察】本介入では、OTIPMに基づき介入を行い、家庭内の役割やその役割が行えず、夫に負担をかけている思いが明らかとなり、介入する作業の優先順位の共有につながった。また、吉川ら(2013)は課題ごとに特異的な遂行技能が習得されると述べられており、作業を基盤とした介入により、課題特異的な技能の改善および、作業遂行上の問題点についてCLが主体的に問題解決することが出来たと考えられる。

【文献】吉川ひろみ、齋藤さわ子(2013). 作業療法が分かる COPM・AMPS 実践ガイド. 医学書院.

## **A case study of regaining partial independence in housework based on OTIPM**

Toshiki Daimon  
Reiwa Rehabilitation Hospital

**【Introduction】** A client (hereafter referred to as CL) with compression fractures of the third and fifth lumbar vertebrae was treated. The client became partially independent in housework following an intervention protocol based on the occupational therapy intervention process model (OTIPM). Permission to present the case was obtained.

**【Purpose】** We show that OTIPM can be used to reclaim independence in various activities.

**【Methods】** The patient was a woman in her 80s. She was admitted to a hospital on Z+76 with compression fractures of the third and fifth lumbar vertebrae. The patient was then transferred to our hospital with Z+95. Prior to admission, she lived with her husband and required assistance in bathing and stair negotiation. The CL also used to make tea and wash the dishes. However, in the initial evaluation (Z+96) using the Canadian Occupational Performance Measure (COPM), she scored 7/2/5 (importance/satisfaction/performance) for making tea and 3/5/5 for washing dishes. In addition, the CL expressed her desire to do household chores and reduce her husband's burden. Upon follow-up (Z+97-132 days), the tasks of making tea and washing dishes were analyzed using the Assessment of Motor and Process Skills (AMPS) based on the OTIPM (Z+110 days). The motor skill 1.1 logit, process skill 1.1 logit, and motor skill were below the cutoff values. She had difficulty in making tea, as she could not carry the teapot to a different work area. Further, the CL could not fix the dishes while dishwashing. In the post-intervention interview, the CL was asked to talk about the issues she encountered, as well as the goal of making tea and washing dishes independently in the same work area. As an intervention, the recovery model consisted of standing work, while the compensatory model involved moving the pot to the same work area as dishwashing.

**【Results】** At the final evaluation (Z+133 days), the patient's AMPS scores were 1.7 logit for motor skills and 1.7 logit for process skills, which were both above the cutoff values. Moreover, COPM results improved to 8/10 and 8/8 (performance/satisfaction) for tea preparation and dishwashing, respectively. After being discharged, the CL became independent in making tea, as evidenced by her ability to rearrange the pot. She also became partially independent in washing dishes, as manifested by her ability to do the activity after having her husband carry the dishes to the sink.

**【Discussion】** Yoshikawa et al. (2013) stated that task-specific executive skills are acquired through and improved by task-based intervention. This allowed the CL to independently solve problems involved with the task.

**【Reference】** H. Yoshikawa and S. Saito (2013). A Practical Guide to COPM and AMPS for Understanding Occupational Therapy. Medical Journal.

## 農業からの引退:OT が関わった高齢男性の作業的移行

齋藤駿太<sup>1)</sup>, 坂上真理<sup>2)</sup>

1) 済生会小樽病院(札幌 OS 勉強会), 2) 札幌医科大学保健医療学部

【はじめに】雇用されて働く場合は定年があるのに対して、一次産業は明確な定年がなく、徐々に仕事への従事を減らしながら、その後の生活の計画を立てることが必要と言われている。そのため、作業的移行の過程が被雇用者とは異なっている。今回、筆者は、両側慢性硬膜下血腫を呈した事で、突然の農業からの引退を迫られた90歳代の男性(以下、A氏)にOTとして関わった。その結果、A氏は農業の技術を伝えるという新たな役割を見いだした。農業からの引退というA氏の作業的移行の過程をOTの関わりと共に報告する。なお、本報告はA氏とご家族からの同意を得ている。

【事例紹介】A氏は70年以上、野菜農家を営み、ヘルパーとデイサービスを利用して、畑裏の一軒家に独居で生活をしていた。20年前から、農家は息子夫婦が中心に営んでいるが、A氏もトラクターを使用して手伝っていた。今回の受傷で、歩行器から車椅子に移動レベルが低下した事で、家族は農業への従事が困難と考え、A氏に農家の引退とサービス付き高齢者マンション(以下、サ高住)への入所を告げた。それがきっかけとなり、A氏は悲観的になった。A氏は、受傷14日目に当院の回復期リハビリ病棟に入院し、同時にOTも開始した。OT評価は、右上下肢 Br.stage VI, FIM103/126(ADLは車椅子で自立)だった。

【経過 1:初回面接から基本方針立案】悲観の具体的な理由を探るためOTが行なった面接で、A氏とOTは、次に示すA氏の作業経験を共有した。A氏は幼少期から、物を作る事に価値を見いだして農業を始め、今まで農業一筋の人生だった。一度、妻の他界や心身の衰えを経験し、施設入所も検討したが、農業は人生そのものと考え、生涯現役を決意した。しかし、家族に農業の引退を告げられた事で、「人生は終わった」と感じ、涙を流す日が続いた。以上の作業経験の話から、OTは、A氏は今回の入院と、突然農業の引退を迫られた事で生涯現役の決意が絶たれ、引退後の生活への移行というプロセスに上手く適応ができていない状態にあると考えた。さらに、A氏にとって再び農家の作業に結び付く事が、作業的存在としての自己を取り戻す上で不可欠な要素と考えた。またA氏は家族の手助けで部分的に農業を行う事も可能と思われた。そこでA氏の思いを家族と共有し、退院後も家族の協力の下、農業に関わる事を目標にOTを行なうことを提案したところ、A氏は笑顔で快諾した。

【経過 2:OT 開始から退院後の生活】OT開始後3週目に家族の協力の下、畑への外出訓練を行い、トラクターの運転、家族への農業の助言をした。A氏は畑に行けた喜びと、自身の老いを実感したと語った。その後、「自分の人生を他者に伝えたい」と希望が挙がり、OTは自分史作りを提案した。過去と現在を振り返る過程で、A氏は「まだ現役かと思ったが、今回で引退だと感じた」、「だけど農業の知識を伝えていこうと思う。それが残された時間を過ごす俺の役割だ」と新たな将来像を語った。A氏の悲観は無くなり、OT5週目にサ高住へ退院し、月に1~2回、畑を訪れて農業の助言をしている。

【考察】今回のOT支援で再び農業が行えた事は、A氏が予期せぬ移行で突然途切れた農家としての人生を取り戻す一助となった。この過程は、A氏が自身の老いを改めて認識する事や、家族に農業技術の継承という新たな作業に意味を見いだす事に繋がった。男性農家の引退は、引退前後の生活の繋がりを維持する事で、引退後の生活に適応していく戦略となる事が示唆されている(Wiseman 他, 2009)。A氏も作業形態は変化したけど、農業との繋がりを維持する事で、前向きな引退への作業的移行に繋がったと考える。

【文献】Wiseman, L & Whiteford, G. (2009). Understanding occupational transitions: A study of older rural men's retirement experiences. Journal of Occupational Science, 16, 104-109.

## **Retirement from agriculture: Occupational transition of older men involved in occupational therapy**

Shunta Saito<sup>1)</sup>, Mari Sakaue<sup>2)</sup>

1) Saiseikai Otaru Hospital (Sapporo OS study group), 2) School of Health Sciences, Sapporo Medical University

**【Introduction】** There is no clear retirement age in primary industries, and it is said that it is necessary to make plans for a future life while gradually reducing work. In this case report, the author was involved in occupational therapy with a man in his 90s (hereinafter referred to as Mr. A) who suffered from subdural hematomas on both sides and was suddenly forced to retire from agriculture. As a result, he has found a new role as a conveyer of agricultural technology. We report this process of occupational transition of Mr. A who retired from agriculture.

**【Case study】** Mr. A was a vegetable farmer for over 70 years and lived alone in a single house. Currently, the farm was mainly run by his son and his wife, but he also used a tractor to help. Mr. A was prescribed occupational therapy at our hospital on his 14th day post-injury. His family found it difficult for him to continue farming and suggested that he retire from the farm and enter the facility which made Mr. A pessimistic. His occupational therapy evaluation concluded that his right upper and lower limbs were Br.stage VI and, FIM103 / 126.

**【First interview / basic policy planning】** From an early age, Mr. A found value in making things and started farming. After experiencing his wife's death plus physical and mental deterioration, he considered entering a facility, but decided to be active throughout his life. However, Mr. A was pessimistic when his family told him to retire from agriculture. From the above occupational experience, it was thought that Mr. A was suddenly forced to retire from agriculture, and his occupational transition to life after retirement was not well adapted to. An occupational therapist thought that it was important for him to reconnect with the farmer's work in order to regain himself as an occupational being and proposed occupational therapy with the goal of being involved in agriculture even after discharge.

**【Intervention progress】** In the third week of the intervention, Mr. A went out to the field with the occupational therapist and his family to actually drive a tractor and advise his family on farming. After that, Mr. A was told that he wanted to share his life with others, so the occupational therapist suggested making his own history. In the process, Mr. A said, "I thought I was still active, but I felt that I was retiring this time." "But I want to convey my knowledge of agriculture." That is my role to spend the rest of my time," showing a new vision for the future. After that, Mr. A was discharged to the facility. Currently, Mr. A visits the fields once or twice a month and gives advice on agriculture.

**【Discussion】** It has been suggested that the retirement of male farmers will be a strategy to adapt to life after retirement by maintaining the connection of life before and after retirement. Mr. A's occupational style has changed, but maintaining a connection with agriculture has led to a positive occupational transition to retirement.

## 日本作業科学研究会 第24回学術大会 実行委員名簿

### ＜大会長＞

山根 伸吾（藍野大学）

### ＜実行委員＞ 50音順

池内 克馬（県立広島大学）

池田 正和（千代田病院）

浦郷 友輔（おかもとリハビリ訪問看護ステーション）

大下 琢也（嶋田病院）

奥 理恵（大野浦病院）

国貞 将志（広島国際大学）

栗棟 浩平（西広島リハビリテーション病院）

古山 千佳子（県立広島大学）

高木 雅之（県立広島大学）

中越 雄也（四国中央医療福祉総合学院）

中澤 紀子（岩国医師会病院）

村竹 真之介（おかもとリハビリ訪問看護ステーション）

安田 友紀（ヴァンサンク ポルテ）


山地 早紀（キナシ大林病院）

吉岡 和哉（群馬パース大学）

本学術大会に当たって、多くの方々にご支援いただきました。  
心から感謝申し上げます。

実行委員一同





*Occupation that enriches our everyday life*

The 24<sup>th</sup> Japanese Conference of Occupational Science